

# 風景としての情報

香月 洋一郎

KATSUKI Yoichiro

(事業推進担当者)

## I 「澁澤写真」

### 1 接写を始めることから

COEにおける私達のひとつの作業に、日本常民文化研究所（以下常民研と略記）所蔵の通称「澁澤写真」に関する追跡調査及びそれにもとづく研究があげられる。これについてはその経緯をCOEの年報に逐次発表してきており、本報告書も、多くをそれについてスペースを割いている。巻末に「澁澤写真」のアルバム56冊分のリスト——これは整理終了分のほぼ半分にあたる——をつけ、そこにCOEでの追跡調査の結果を略記した欄を設けてその状況を示している。この稿では、まずその写真資料についての性格や問題点を示し、ついでいくつかの考察を述べておきたい。

1982年に常民研が神奈川大学に移管された際、数多くのダンボール箱にはいった膨大な資料を引き継いだのだが、その中に120冊ほどの写真のアルバムがあった（その概要については118ページ参照）。それがここで述べる「澁澤写真」の中心となるものである（写真1）。

まず私達は、アルバムの写真の接写作業を検討した。というのは、アルバムに貼られているスチール写真にはネガフィルムがなかったからである。そしてそのネガフィルムについての情報——紛失したのか、どこかにあるのか、あるいは焼失などで失ってしまったのか——も皆無だった。

接写作業を始めたのは今から十五年ほど前のことになる。まだその頃はデジタルカメラが普及しておらず、接写といえば一眼レフのカメラを使っての35ミリフィルムでの接写が一般的だった。アルバムに貼られたスチール写真の大半は感光紙が小さく、いわゆる名刺サイズ程度のものであり、また劣化もすすんでいた。そのため接写はプロのカメラマンに依頼すべだと考えたが、当時、接写はきわめて高い金額を請求される作業だった。はじめに交渉したカメラマンの請求額はワンシャッター3000円だった。彼の技術と手間を考えると、これは妥当性をもつ要求だったのだが、対象とするスチール写真の枚数は4000点を越す。それだけで1200万円余りの費用を必要とすることになる。これは予算的対応が不可能な額だった。この稿を書いている現在の時点では、多少なりとも「澁澤写真」はその重要さが認知され、外からの問い合わせも増えているのだが、当時は、数十箇のダンボール資料のごく一部という形で認識されていたにすぎず、どちらかと言えば手付かずの状態で冷遇されていた感があった。そうした資料に対して研究所の予算の年間の四分の一の費用をかけることはきわめて困難だった。

そのため安く接写を引き受けてくれるカメラマンをさがした。一年余り後、やっとそうしたカメラマンを見つけたのだが、彼からは、自分の空いた時間にその仕事を行なうため、一年間の接写量は自

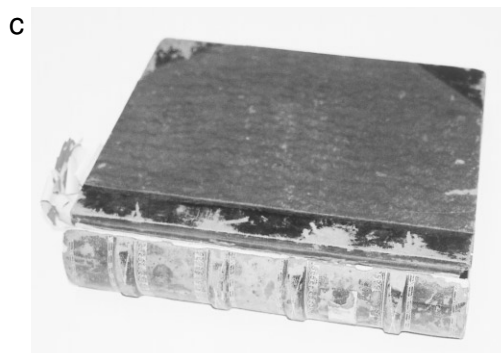
写真1 「澁澤写真」



a 書架での保存状態。



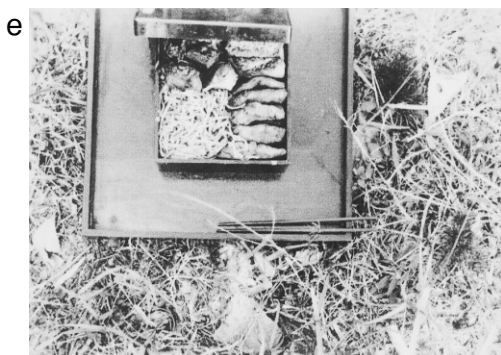
b このタイプのアルバムが大半を占める。これは22.1cm×18cm。背の厚さ2cm。



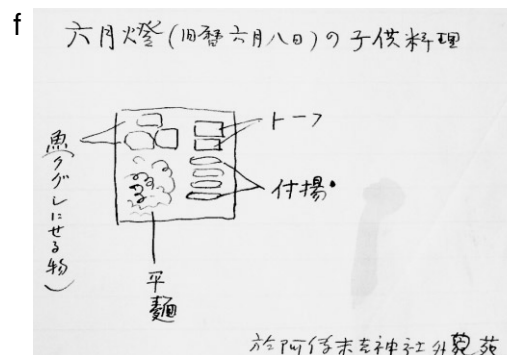
c もう一種類のアルバム22.6cm×19.9cm。背の厚さ5cm。



d bのアルバムの内部。アルバムというよりも四穴のファイルノートになる。台紙に写真が貼られている。



e 喜界島のアルバムの写真の一例。この写真の場合はその下に説明の図が付けられている。



分で決めさせてほしい旨の条件出され、これを了承した。費用は当初の四分の一以下の額ですんだが、その接写作業のスピードは、彼の都合によるため平均すると年間で四〇〇コマ余のペースだった。作業終了までに十年を要したことになる。この接写が進行中、接写し終えた写真については逐次その接写ネガから伸ばしたカビネ版の写真を貼った検索カードの作成を並行して行なっていった。このカードにはアルバム台紙に記されていた説明文なども書きこみ、カードには通し番号をつけ、主要な整理作業はこのカードで行なった。(本報告書のなかで写真右上にSAと記しナンバーをつけているのが『澁澤写真』になり、SAに続く番号がその整理作業における通し番号になる。なお『未整理』と記しているのは、2007年度に整理するものになる。)

また、ダンボールに納められている他の資料の整理中に、その中からも数十枚のガラス版写真や、封筒に入った若干のステール写真、ガラス板のネガが見つかった。これらを選別し、その接写作業もすすめ、またガラス版からは密着版を作成し、これもカード化した。このガラス版は多くに汚れがついていたが、ガラスと薬剤の間にセロハン状の膜があり、——昭和初期頃のガラス版写真のひとつの特徴だということだが——水洗をするとその膜が面としてはがれ落ちる可能性があるため、乾いたやわらかい布で表面の汚れを落とすにとどめて密着版を作った。

こうした諸作業に区切りがついてのは2003年のことになるが、この頃からデジタルカメラの普及、高性能化は著しく、接写も従来とは違う方法で低予算で可能になったのは皮肉な流れだった。

上記の4000余点及びガラス版写真のカード化までの作業を、とりあえず第一次「澁澤写真」整理作業と表現しておきたい。というのは、さらにこのあと「澁澤写真」自体が増えたからである。

かつての常民研所員河岡武春氏の所蔵資料（これは1986年に同氏が亡くなったあと、神奈川大学に寄贈された）の中から4000点ほどの写真資料が見つかった。これはおそらく常民研が財団法人時代に当時所員だった河岡氏が、第一次「澁澤写真」整理作業でとり扱ったアルバムの中から選別して台紙ごと取りはずして抜き、写真集を編むべく作業をすすめていた途中のものと推測される。だとすれば、この両者は基本的には撮影時期や撮影者において同じ性格をもつ資料と考えられた。ただし私がチェックした限りにおいては、この河岡氏所蔵のものの方が、いずれ写真集を編むべく意図的に選別されたものらしいだけに、内容、精度、アングルなどが良く、アルバムに残っていたものはそれより若干クオリティに欠ける感があった。

つまり、従来から常民研に所蔵されていた「澁澤写真」の整理作業が終了し、研究や一般公開にむけての姿勢がほぼ整ったところに、それより精度の良い同類の写真群が見つかったことになる。そのため整理、公開について全体的に新たな仕切り直しを考えざるを得ない状況になるに至った。ちょうどそうした時期に、COEにおける同写真の追跡調査が開始され、この調査作業がそのために若干の混乱や、やりにくさを引きずりながらでの調査であったことは付記しておきたい。

## 2 一般公開に向けて

この写真群の公開については、いくつか配慮しなければならない点がある。

一番の問題は、前述したようにネガの存在が不明な点である。写真のほとんどはアチックミュージアムの調査時に撮影されたものになるのだが、その撮影地が多岐にわたっていることから、澁澤敬三が、経済的な支援を含め様々な形でサポートし、これまた様々な研究者がシャッターを押したものであろうと推測される。一部アルバム台紙には撮影者が明記されているものもある。後述する喜界島の例のように、その撮影の状況がわかる例もあるが、そうした例は多くない（こうした点については巻末リストの「撮影者」、「撮影年月日」「撮影地域」の欄を参照）。

これらは今から70年ほど前に写されたものであり、その具体的状況の追跡調査も困難な時代に入っていることは否めない。澁澤家の御子孫からは、この写真を常民研において自由に使って良い旨の承認はいただいているが、この写真について最も強い権利を有しているのは、あるいはどこかにおられるかもしれないネガ——たとえ一部のネガであっても——の所有者になろう。現在、著作権法はその権利を死後五十年と時期を設定している。2006年の現在、おそらく多くの写真は、この法的な時

期の縛りからは解放されているのかもしれないのだが、断定はできない。本写真群の資料性の高さを思うと、これは少しでも早く一般に公表すべきであり、その方向に私達は歩を進めているのだが、おそらく慎重に、またあるマナーのもとに作業をすすめなければならない部分も抱えている（注1）。

問題点をもう一点述べておく。この写真群の追跡調査は、COEでの作業とは別に、六、七年前から、常民研において、二つの地域についてすすめていた。一箇所は越後三面（新潟県村上市）の写真について、もう一箇所は鹿児島県大島郡喜界町の写真についての調査になる。前者は今から六年ほど前、三面をフィールドにしている田口洋美氏（東北芸術工科大学）にお願いしたのだが、アルバム台紙のキャプションに、点数にして数点ではあるが、誤記があることが判明した。あきらかに三面の写真でないものに三面であるような旨の表記が見られたのである。写真を写した人と整理して台紙に説明を書きこんだ人が別人だったのであろう。また、18番目の番号が背に付されているアルバムの台紙のあるページには、「場所櫻田先生に聞く事」とただし書きがみられる（SA770の写真。「櫻田先生」とはアチック・ミュージアム同人であった櫻田勝徳を指すと思われる）。これは整理者のメモであろう。

とすると、アルバム台紙の説明文に完全な信をおくことはできず、こうした説明の文章自体も検討の対象となることになる。計8000コマの写真の完全かつ正確な「戸籍調べ」がすべて完了した後の一般公開ということが理想であろうが、それはきわめて現実性に乏しい想定であろう。とりあえずは説明文にそうした誤りがある可能性を明記した上での公開が必要になろう。逆に公開をしていくなかで諸情報を得て、その「戸籍」や「来歴」を明らかにし、逐次それを加えていく方が考えられていように思う。

こうした問題についてどのような手順と姿勢で私達が対応し写真を公開していくか、この数年のうちに明確にし、作業をすすめていかねばならないのだが、とりあえずここでは、本報告書の主軸となる「澁澤写真」の現状とその問題点を略記した。なお、写真のほかに澁澤が撮影させた動画映像資料もあるのだが、——これについては実務上は「澁澤フィルム」と呼んでスチール写真と区別している——その状況については本報告書の主旨とは異なるため省いている。

### 3 澁澤門下の写真

このCOEにおける「澁澤写真」に関わる作業は、調査手段としての写真のありようと資料としての写真のありよう、さらにこの二者の関連性を探る性格をもっている。

今から七十年ほど前に生活文化を探る一手だてとして、ごくありふれた日常生活から情報として切りとられ感光紙に定着した画像群に対して、それらが日常生活をどのように切りとったものなのか、またそれらが資料としてどのような可能性をもっているものなのかを考えるのが、その基本的な問題意識になる。

たとえば、まず澁澤はその周囲の人たちに、直接であれ間接であれ、また直截であれ婉曲であれ、どのような対象にどのような姿勢でシャッターを押すように教示、要望したのだろうか。

その対象がごくありふれた日常生活であり、カメラのシャッターを押すという行為が現在よりはるかに日常的でなかった時代では、そこには写す人の個性や姿勢、問題意識が強く煮詰められ反映していようが、そこに澁澤からの影響はどのように見られるのであろうか。残念ながらそうしたことが直

接にわかるような資料は残っていない。ただ澁澤は写す人の個性を矯めるような指示はしなかったことは確認できるように思う。

私がそう思うのは、澁澤敬三の周辺で研究活動を行っていた早川孝太郎と宮本常一の写した写真を見たことによる。私は宮本の晩年、十二、三年ほど彼に師事し、彼が調査においてどのような写真を写し、それをどう活用してきたかある程度見る事ができた。ただそれが宮本個人の「方法」なのか、どのような形か「澁澤敬三」につながるものかはよくわからないでいた。

2005年に『早川孝太郎全集Ⅻ』（未来社）が刊行されたが、そこには須藤功氏によって編まれた。早川をはじめとするアチックミュージアムの同人達の写真、スケッチが600点以上紹介されている。これを見ると、宮本が試みていたカメラをどのように利用するかという模索は、ひとり宮本の模索ではなく澁澤と彼をとりまく人々もまた、各々の姿勢でその試行を行っていた足跡がうかがえる。

宮本は1940年33歳の頃からフィールドで写真を撮り始め、これは晩年まで続いた。これについて彼はこう述べている。少し長いが引用する。

「私は旅をはじめたころからカメラをもって歩いた。初めはコダックの八枚どりの小さな古風なものであった。そのころは民俗資料と思われるものだけをとった。

二、三年たってブローニーのカメラにかえた。それを昭和三十年ごろまで使ったが、フィルムがたくさんいるものだから、必要なものしか写さなかった。実はカメラを買う金もなくて、もらいものだったのであるが、昭和三十年になって、やっと三十五ミリのカメラを手に入れた。これならフィルム一本で三十六枚とれる。それから何でも写すようになったが、昭和三十六年からオリンパスペンにかえた。するとフィルム一本で七十二枚とれる（これはいわゆるハーフサイズのカメラを指す——引用者注）。

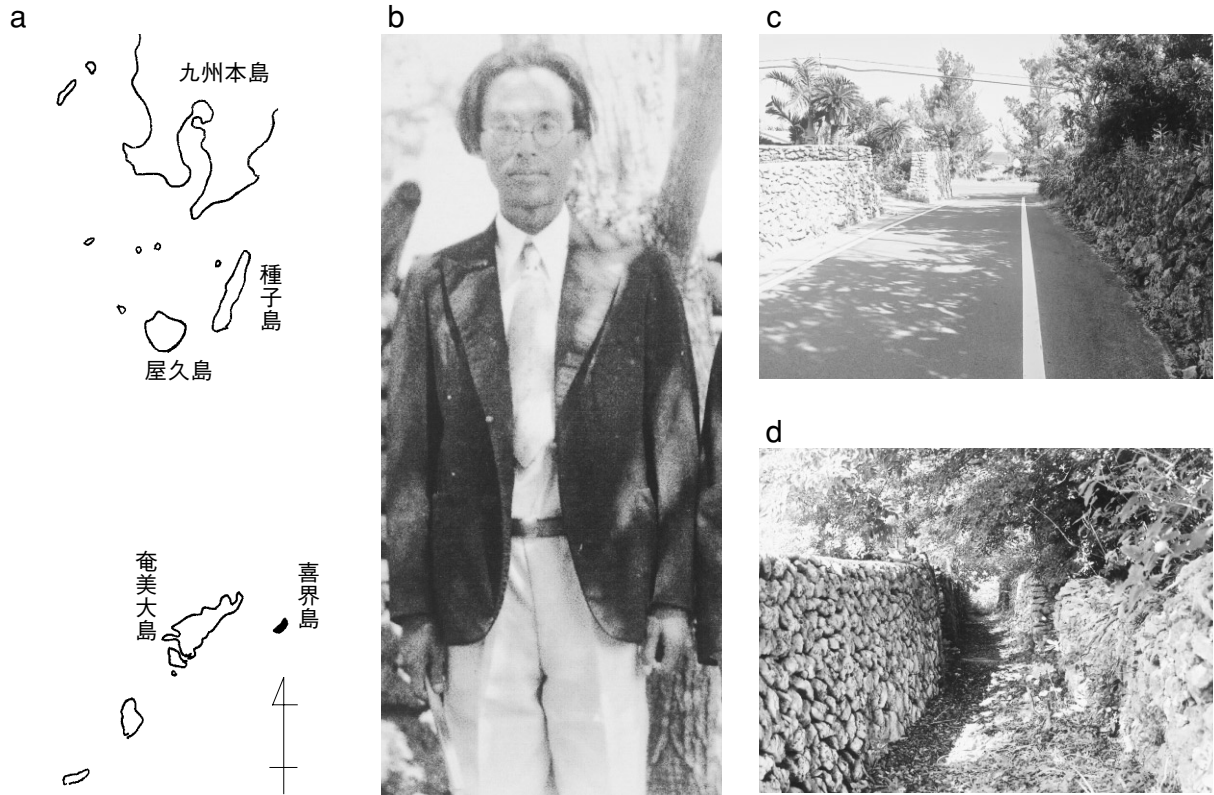
私はカメラをメモがわりに使っている。これは何だろうと思うもの、記憶しておきたいものなど何でも写しておく。いわゆる民俗学的資料以外のものもとっておく。民俗的な資料や伝承は孤立して存在するのではなく、生活の一部として存在するのである。するとその生活全体が一通りわかることが大切である。また古いものがこわされて新しくなってゆく様も写真にしておく必要がある。

それを密着焼では小さすぎるから名刺判にしてスクラップ・ブックに写した順に貼っておくと解説はなくても、記憶を呼びおこしていくことができる。ほんとうは解説をかくなり、ネームをつけておくのがよい。（中略）

記憶を積み重ねることはむずかしくても、写真にしておくことと積み重ねのできるものであるとともども比較もできる。そしていろいろのことに気付いてくるのである。たとえば水田は明治以来耕地整理がたびたび行われてその形がずいぶんかわっているが、畑の方はたいていひらいたときのままの形をしている。それらの畑にはひらいた時期のわかるものもあり、地名によって推定できるものもある。それによって共同開墾か個人開墾かもわかってくるし、どんなひらき方をしたかも推定されてくる。そしてそのひらき方によって村の性格もわかってくる。親方が中心になって同族や子方を率いてひらいたものか、同じような規模を持った者が何人かで集まって共同開墾したものであるか、あるいは焼畑から定畑になったものか、初めから定畑としてひらいたものかというようなことも推定されるものである。

水田の方も、もとの形のままである場合には、その推定はつくものであるから、耕地整理のされて

写真2 阿伝と岩倉市郎



a 喜界島位置略図。

b 岩倉市郎「岩倉さんは背が高くて、いいスーツを着こなして歩いてましたよ」(長岡トシさん談)。

c 道の先方、T字路になっているところにいつも岩倉市郎がカメラを持って立っていたという。岩倉宅はこの写真では絵柄から切れているが、左側の石垣の区画の隣になる。阿伝の家々は石垣に囲まれているが、この写真の左側の石積は新しい。1953年の本土復帰後、車道が整備されて道が拡張された。その際につきなおされた。拡張部分は左側だけだったため右の石垣は旧態をとどめているという。

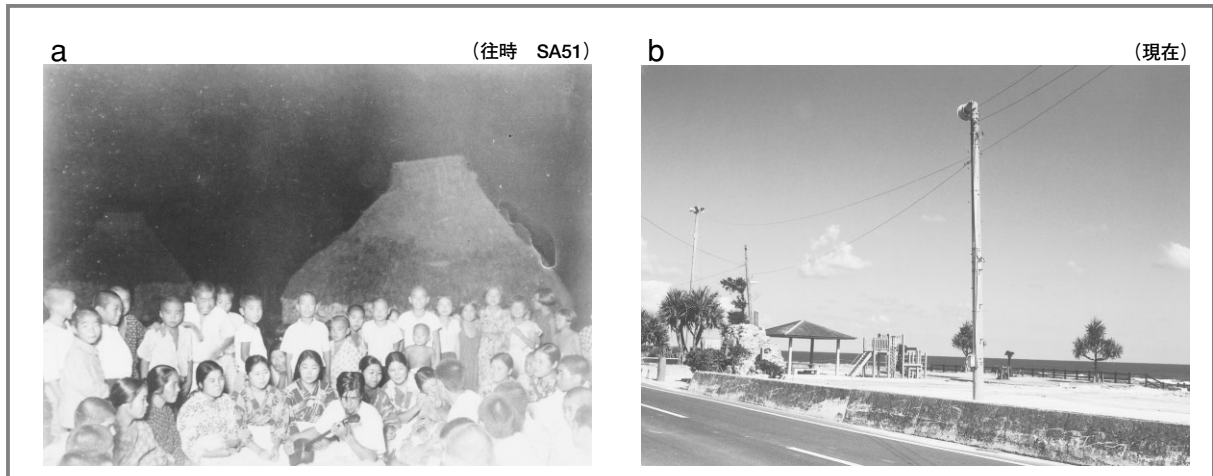
d かつてのおもかげをそのままのこしている道もある。ここは舗装もされていず道幅も昔のまま、1.8メートルほどである。



e と f は新旧の比較写真。これは岩倉市郎宅。e のアルバム台紙の説明には、「正月の門飾 (阿伝、岩倉宅)」とある。正月にそなえ、暮れにむらびとは浜から白い砂を運び家の庭にまく。門の両側にはその砂で小山を盛り、そこに三本の木で支えをつくり、そこに正月の門飾りの松を立てる。これがその写真になる。モノクロ写真のため白い砂がまがれている状況は情報としては伝わりにくい。門の入口左手に板戸が見えるが、これは放牧している小馬などが入らぬための配慮。石垣の角が切石で算木積み風に仕立ててあるが、これはむらの中でもスーター (知識層) の家の特色であったという。岩倉の父親は村会議員 (当時早町村) をつとめていた。f は空地となっているその現況だが、前述したように石積みはのちのものである。f は2006年10月撮影。

なおeの写真右上のSA44は、カード整理上の番号 (巻末のリストと対応) であり、e、fの写真を囲った枠は同じ場所の往時と現況との比較であることを示している。(以下の写真欄も同様、SAでなく「未整理分」とあるのは、文字通り未整理でまだ整理番号が付されていないことを示している。)

## 写真3 夏の浜にて



C (往時 未整理分)



aは説明に「夕涼み 盆14日の夜 蛇皮線をならしてうたをうたひ、たのしむ」とある。これは阿伝の浜であり、人々の後に写っているのは砂糖小屋である。男の子はシャツにズボン、女の子は浴衣というのがこの頃の日常の姿だった。ただしこの10年ほど前までは、男の子もカスリの着物が一般的だったという。

bはその現況(2006.10)浜が盛り土をされ公園として整備された。この中に岩倉市郎の記念碑もある。

cはaと前後して写されたもの。これには「夕涼み(盆の十四日の夜)於阿伝 昭11.8.30」とある。これが「夕涼み」の本末の姿で、aは写真撮影用に並んだものということがうかがえる。

いないような水田の形もできるだけ写真にとっておくようにしている。

石垣の積み方のようなものでも、各地の石垣の写真を集めていると、おのずから発達過程がわかってくるものである。

つまり人間が手を加えたすべてのものにその時代時代の歴史が反映しているはずだし、またそういうものにのちのちの生活が左右されたり支配されたりするものである。(中略)

そのほか何でも気をついたことは写真にとっておくと、その場ではそれがどんな役にたつともわからないが、その後同じようなことに気をつけて見るようになる。そうしたことが視野をひろげていく役割をはたしてくれ、いろいろの角度から物を見る訓練になってくる。」(注2)

宮本常一が旅をする早い時期からカメラに興味をもっていったこと、しかし彼が写真に自分の問題意識を強く投影し得るようになるのは昭和30年頃からであったことがうかがえる。ここでふれる「瀧澤写真」の時代より二十年ほど後のことになる。また、前述した早川孝太郎が残した写真の撮影時期よりもおそい。昭和10年当時、ごくありふれた日常生活の光景に何の惜し気もなくシャッターを切っていたアチックの同人や先輩の姿や写真を宮本は目にしていたはずである。彼がカメラを自由に使えるようになった時、そのことはどこかで彼の写真観——調査手段としての写真観——に反映してい

写真4 新旧の景観

a (往事 SA166)



説明に「畳干(夏季大清潔)於阿伝 昭11」とある。

b (現在)



aの現況。阿伝のむらの北端にあたる(2006.11)。

c (往時 未整理分)



「泉にて洗濯する女 着物に水をかけて足で踏みこむ 於川嶺村 昭11.4.7」とある。

d (現在)



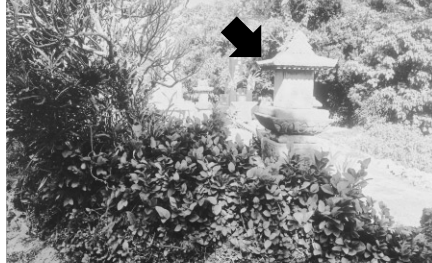
cの現況。現況というよりcの地はこの草むらの先にある。盛土をされて旧態はない。

e (往時 SA50)



「盆送りの夜の墓場」との説明。

f (現在)



eの現況。e、fの矢印は同じ墓石。eで右から二番目の墓石の中は本土に移され、その墓石は倒れていた(2006.10)。

g (往時 SA106)



「子供(於阿伝 昭11.4)」が説明文。阿伝小学校の校庭。向かって右の建物が職員室。正面は教室。いずれにも台風よけの突っかい棒がみえる。前列右手の子供達が持っている輪は井戸の滑車のこわれたもの。その溝に棒をあててまわして遊んでいた。中央の子の竹カゴはウサギのエサとり用の竹カゴ。

h (現在)



gの現況。校舎はこの風景が見おろす高台に移された(2006.10)。



たのではないかと思われる。少なくとも己の問題意識をそこに奔放に反映させてよいという彼の確信の一部を成していたように思う。

私は宮本常一の写真については、別のところで述べたことがあるので（注3）、ここでは立ちいってふれないが、御子息の宮本千晴氏がその特徴をあらわす次のような一文を書いておられる。

「父はきわめてあたりまえのことをやっていた。自分ないし自分たちの生活と生活感情をを繰り返し繰り返しチェックし、そこからくる敏感さで目に映るものをひとつひとつ気にとめようとしたにすぎない。あたりまえのことを注意し、常に全体像をつかもうとした。父の写真術がそのひとつの例である。コンパクトでシンプルなカメラを使って、片手で片端からメモをしていった。『あっと思ったら写せ、おやっと思ったら写せ』と指導した。

何かを探す写し方ではない。当然一コマとしては使いものにならない写真が多い。しかし、たとえば東アフリカを大いそぎで歩いたとき、そのコンタクト・プリントを見て私がからかうと、『それでも、わしの通った所については、どこでどういう作物を作っており、何を作っていないかが一通り分かるじゃろう』と弁解した。【中略】とにかく、歩くこと。歩いて見ること。外を見、みずからのすみずみを見ること。歩いて外を見ることで、見る目の新鮮さや驚きのにぶることを防ぐこと、つきつけられた問題にすべてを取り組もうとすることで、重大な見落としを防ぐこと。その勇気と気力を得つづけるために歩いて接して取り組むこと。」（注4）

宮本の写した写真と早川の写した写真はたしかに違う。前者に強くあって後者にうすいものは、日常の「雑然さ」をまず受けとめ、そしてその中にある体系をすくおうと模索する間口の広さと焦点の多様さであり、後者にあって前者にうすいものはある種の清澄な鋭さになる。しかしこの早川の張りつめたような一面を持つ切り口の鋭さは、同じアチックミュージアム同人の櫻田勝徳の鋭さとはあきらかに違う。

彼等アチックミュージアム同人の問題の関心のありかたは必ずしも同じではない。しかし彼等各々がどのようなアプローチで各々のテーマに迫り表現しようとしていたかについては、きわめて自由で柔軟な状況でそうしていたであろうことが、写真を通してのその個性のあらわれ方に共通にでているように思う。一個人が作り、残した資料である以上、そこには強いバイアスがかかっている。彼等は自由にのびのびとバイアスをかけている。シャッターの押しかたに個性と姿勢が自由な形であらわれている。澁澤はまずそこから始めさせている。「方法」とはそこから始め、そこから掘り出すものだというように。

けれどもそれは、写真に関してその模索の状況を直截に伝えてはいるものの、それがどのような方向に収斂していくものであるかについて明確な形で残っているわけではない。では後世、それを資料として使う者はその混沌にどう向きあっていけば良いのか、これはそう簡単に答がでる問ではない。ここではその第一歩として、今年度に行なった鹿児島県大島郡喜界町における追跡調査のレポートを示しておきたい。それは同時に喜界島の写真を写した岩倉市郎の「眼」を探ろうとする調査でもあった。この当時、喜界島には湾という商業集落に写真店が二軒あっただけであり、その二か所以外に島内にはカメラなどなかった時代である。岩倉はなにをどのようにシャッターで切りとろうとしたのだろうか。

## II 喜界島の写真について

### 1 追跡調査

喜界島を写した写真は整理済のものがほぼ二百五十点（アルバム9冊分）、未整理分が100点余りあり、前述したようにこれらのほとんどは1943年に40歳で亡くなった民俗学者の岩倉市郎（写真2-b）が写したものになる。この間の事情については、当時岩倉氏の助手をつとめていた拵嘉一郎さん（1914～）が御存命であり、2007年に常民研から刊行予定の氏の手記の一部には次のようなくだりがある。

「岩倉さんが喜界島の民俗調査を始めるに当たって、私を助手として声をかけて下さったのは、岩倉さんが小学校の先生として教鞭を執っていた時の教え子の一人であった事と、同じ集落の者として私の性格や家庭事情も充分知悉していた事や、私の病気にも相当配慮した上、多少の活動はかえってアフターケアにもなると、自分自身の病気の体験から、好意的に思いやりの判断をした事等が、大きな理由であったと思う。

それから一年有余、私は岩倉さんの指導を頂きながら、文字通り私生活の面迄も行を共にしながらこの調査に協力した。

しかし、当時の島の社会は多分に封建的な色彩が強く、文化的にも経済的にも、全く恵まれない世相の中で、島の人達の考え方や価値観は、悪い言葉で表現すれば、拝金主義と言われても仕方がない程、人々のお金への執着は並々ならぬものがあった。

従って、昔話や民具の採集をしたり、或いは昔から継承されている庶民の生活や習慣等を調査する、金にならないこの学問が、何の役に立つのか、それを理解する文化的背景も、また理解しようとする雰囲気もなかったのである。

恰度この時期は、日支事変勃発の直前で、世界的な経済恐慌の中で、国の政治も不安定であったが、経済もまた不景気の真っ只中であって、このような時代背景にはそぐわないこの種の調査や学問は、ほんの極一部の人を除いて、島の大半の人達にとっては、どうにも理解出来ない事であったし、また関心もなかったのである。（中略）

私が岩倉さんの誘いに応じ、勤め人のように、毎日岩倉さんの家へ日参しだしたのは、昭和十一（一九三六）年陰暦一月十五日の小正月が済んだ直後の事だったと記憶している。

岩倉さんは、仕事を始めるに当たり、この学問がどのような学問であるのか、またこの調査がどのような目的をもち、どのような手順で、どのような調査をするのか等について、『喜界島生活調査要目』（岩倉市郎作成の調査要項——引用者注）の内容に触れながら、詳細な説明をしてくれたが、当時の私の知識や能力では、それを十分に理解するには程遠く、不安の中での出発であった。

岩倉さんは、そんな不安を持つ私の心情を察してか、

『そんなに難しく考える事はない。仕事をしていく段階で、少しずつ勉強して理解していけば良いが、ただ君がやる仕事の概略と、本調査に当たって絶対に守っていかなければならない基本的な条件があるので、その事だけは最初から理解して守って貰わなければならないので、その事について話しておきたい。』と、説明された内容は粗方次あらかたのような事であった。

一 調査の段階で発見される古文書や記録類は、判読出来るのは君がそれを写録する。しかし、判

読出来ないものについては、自分が別途考慮するから、絶対に当て推量で写録しない事。

- 一 聞き取り調査は、一人より二人同時でやった方が、より正確を期する事になると思うので、調査は出来るだけ二人で出掛ける事にするから、その中で君は調査の方法、手順、要領等を学んで貰い、<sup>あと</sup>後々自分一人でも何とか調査出来るよう勉強して貰いたい。
- 一 写真は調査の補助的資料としても、また写真そのものが資料となる場合でも、絶対欠かせないものであるから、数多くの写真を撮る事になるであろうから、その撮影から現像焼き付け迄、全て二人でやる事になる。その為必要な写真機や写真器材は、全て東京から持参して来てあるので、<sup>あと</sup>後は二人で適当な暗室を作る事にしたい。
- 一 喜界島の食文化の調査をしたいので、大変な仕事になると思うが、一年間を通じての喜界島の農家の食事日誌を、細大洩らさず、正確に正直に書いて貰いたい。  
ただし、文の構成や文章のまずさ等は全然関係ないから、変な修飾などはしないで、ありのままを書いて貰えればそれで良い。
- 一 この調査全般に渡って言える事だが、臭い物には蓋をしろと言う概念は一切捨て去って、間違ってもこれを犯す事がないよう充分注意して欲しい。
- 一 自分は速記が出来るので、聞き取り調査は速記で採集し、それを翻訳しなければならないが、更にこれを原稿用紙に清書する作業がある。勿論自分もやるが君にも少し分担して貰いたい。
- 一 君は青年会の役員をしているから、青年会の行事に参加する場合は、この調査に優先する事にする。
- 一 調査にはバスを利用する事もあるが、原則的には小回りの利く自転車を利用する事にする。

(中略)

岩倉さんが私と一緒に、最初に手がけたのは、写真現像の為の暗室作りから始められた。ご両親の御諒解を得た岩倉さんは、岩倉家の表座敷の裏部屋に当たる通称「クウダツ」といわれる部屋の目張りや、暗幕の設置、バットの置き台、乾板の置き場所、プリントの吊し場、水洗いのための盥の置き場所等、素人の二人では中々大変な事ではあったが、何とか使える暗室らしきものを作り上げる事が出来た。

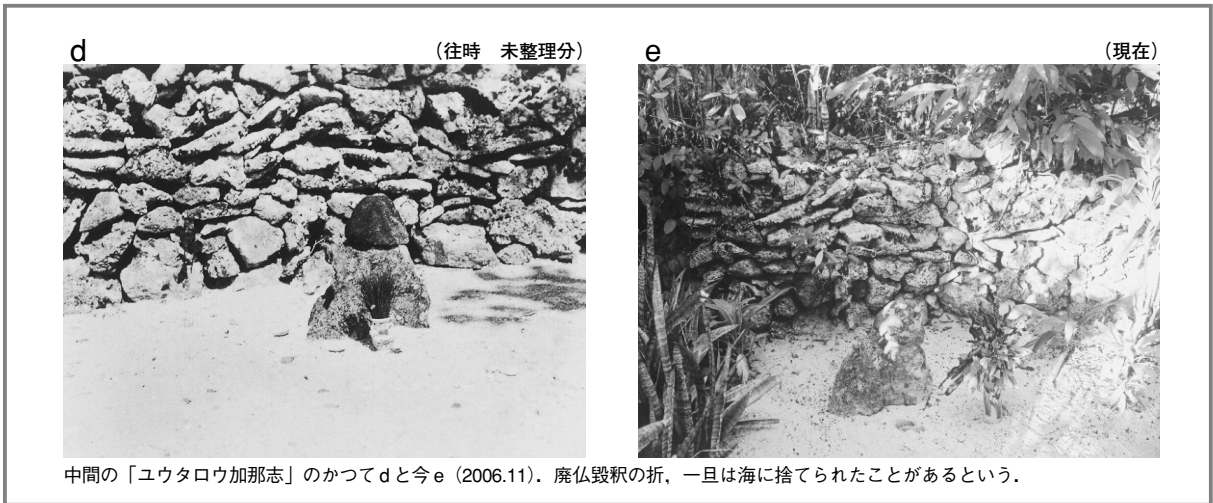
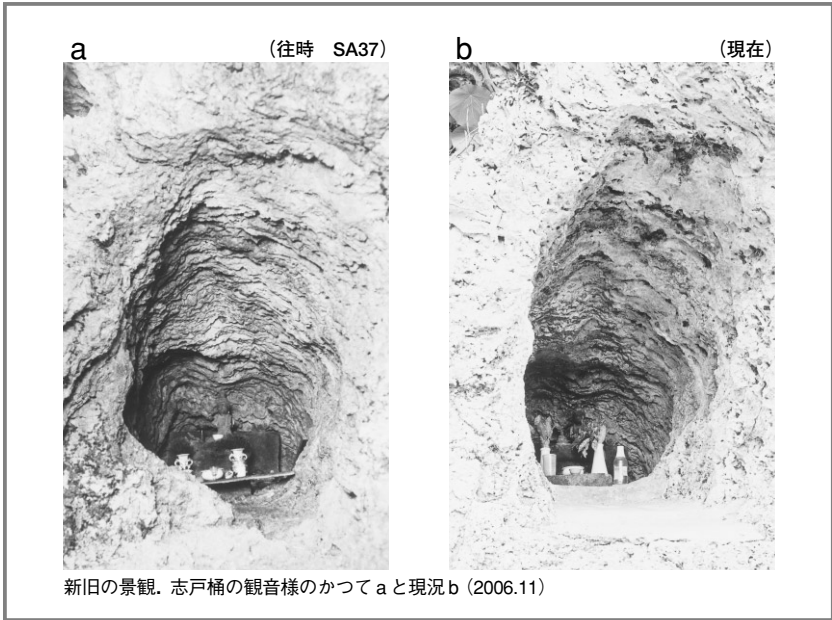
私は、この暗室作りに岩倉さんの仕事に対する取り組み方や、どんな小さな事でも決しておろそかにしない物事への対処の仕方、或いは仕事に対する情熱を学び取る事が出来て、人としてのあり方を教えられたような気がした。」(注5)

「濫澤写真」についてこうした状況がわかるのは、現在の段階ではこの喜界島の分のみであり、その意味では、この写真群は一般公開に向けての諸権利関係が確認しやすく、近いうちに資料として公開できるものと思われる。

岩倉市郎は喜界島の阿伝<sup>あでん</sup>というむらの出身であり、現存する360点のほどの写真——前述したように整理分約250点、未整理分100点余。これが岩倉の写した写真のすべてかどうかは不明なのだが——のうちの半ば以上は阿伝のむらもしくはその周囲の撮影したものになる。

「岩倉さんは自分の家の門を出ると、いつも海に向かう道において行って海に向かってカメラを持ってじっとのぞいていた(写真2-c)。フィルムの板を上から入れるジャバラのついた写真機で三脚は使っていなかった」そう思い出を語ってくださったのは阿伝の1923年生まれの晶貴一真さんであ

写真5 祈りの場所



る。晶貴さん達子供は、当時珍しい写真機をもっている岩倉さんのまわりに集まった。それを岩倉さんは撮ってくれた。そう語っておられた（その一例が写真3-a）。

この250点ほどの写真の中に、画像がズレているものが十点ほどある。ひとつは道を歩いている人物を追いかけながら写したものであり、これについては後述する。もう一種のブレは前述の拵さん——当時二十一、二歳の青年——がシャッターを押したものだという。拵さんはいくつかのブレた写真を指さしながらそのことを苦笑しつつ話された。

今回の喜界島での追跡調査は、阿伝公民館でむらの方々四人ほどに写真を見ていただきつつ話をうかがい、また得本拓さん（喜界町図書館）の御協力のもと島内をまわったものだが、そのいきさつはいずれ別稿でふれるとして、いくつか気づいた点を述べていく。

## 2 神仏のやどる場

七十年前に写した写真を持ってその現地で追跡調査をし、撮影地点を特定する場合、聞き書きなどから情報が得られない時、まず手がかりにするのは、比較的形が崩れていない景観——たとえば山の稜線など——であろう。喜界島の調査においてもそうしたことは多々あったのだが（写真8-d, f）、もう一点、比較的变化りにくい例として、様々な信仰上の場所があげられる。激しい政治的変動や社会的価値観を揺るがすことがおきれば、逆にこうした指標は塗りかえられるほどの大きな波をこうむるのだが、そうでない限り、その空間は地域の人々によって祈られ守られてきた。逆にその場をとりまく周辺の空間の変貌と好対照をなしてその空間は旧態が維持されており、その対比が人々の祈る心の強さをものがたるかのようなようでもある。

ここでは志戸桶<sup>しとけ</sup>の観音様（写真5-a, b）と、中間の「ユウタロウ加那志」（写真5-d, e）をまず示すが、こうした信仰の空間がそれでもなお時代の波を受けざるを得なかった例として、阿伝の氏神社である末吉神社をあげることができる。この神社の背後の台地で、サトウキビ畑の整備のための基盤工事がすすみ、その排水路を境内の下を走らせざるを得なくなったという。そのため境内の一部に盛土がなされ、鳥居の場所の地面も盛られ、その結果鳥居の丈が低くなってしまった。これは今から二十年ほど前のことだという。（写真6-a, b）

この神社の旧6月8日の祭、「六月燈」<sup>ドゥンガンデー</sup>については、整理済みの分だけで十八点ほどの写真が残っている。写真6-jで神楽を終わった後むらの人々が食事をしている場所は、拝殿にむかって左側の空き地である。ここは一面の砂地であったが、今では六月燈のごちそうをここで食べることはなくなっており、また、この場所も2005年の台風で周囲のガジュマルがなぎ倒され、陽光がさしこむようになり、一面の草原と変わっている（写真6-l, なおl, mの写真中の矢印は同じ樹木を指している）。また、神社の建物自体は、かつてはその屋根が黒瓦葺きであったが（写真6-e）、現在はトタン葺きに変わっている（同f）。

## 3 道をゆく人

写真をもとにして、こうした往時から現在への変化を追うこと自体、必要な作業であるが、ここではそうした事例を逐一紹介することを省き、——本文ではふれないが、ある程度写真で紹介している。2枚もしくは3枚の写真を枠で囲ったものは、同じ場所の往時と今の写真を示している。——この写

写真6 阿伝の氏神 <sup>すえよし</sup>末吉神社 その1

a (往時 SA11)



b (現在)



正面外観のa往時とb現在(2006.10)。現在は盛土をされたため鳥居が低くなっている。鳥居のむこうに大きな岩が二つ重なっている。その重ね目のところに「生児初めて末吉神社(阿伝)前を通る時 小石三個を拾ひ三つ重ねて上げる」とこの岩を写した別の写真(未整理分)の説明文にある。この巨岩の存在から、「末吉」とは「掘石」ではないとも言われている。

c (往時 SA12)



d (現在)



鳥居をくぐってふりかえった時のc往時とd現在(2006.10)。左に見えるのが重なった巨岩。

e (往時 SA07)



f (現在)



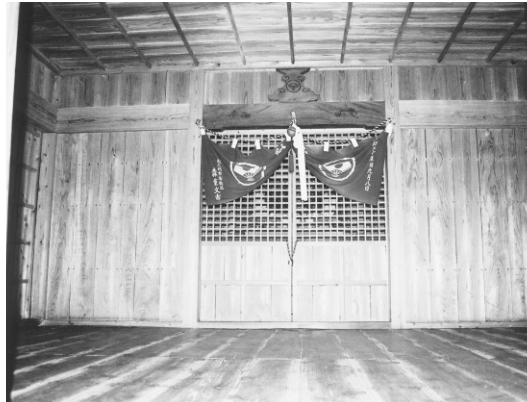
末吉神社本殿のかつてeと現在(2006.10)。黒瓦葺きからトタン葺きへ。eで本殿の前に立っているのは同神社の神宮。

写真6 阿伝の氏神 末吉神社 その2

h (往時 SA09)



i (現在)



社殿内部の往時hと現在i (2006.10). hには「ショーグック 一日と十五日に参詣する」と説明文にある. 左から三人目が神官, その右隣は小学校の校長先生. なお現在も1, 15日におらの人が交代でおまいりしている. かつて掛けられていた奉納額は現在はない.

j (往時 SA19)



k (現在)



六月燈の祭の様子. 六月燈とは「ドゥンガンドー」と言い旧6月8日に行われる末吉社の祭礼でその前日の夕方に男の子たちが灯笼を奉納した.

iの場所の現況 (2006.10).

l (往時 SA05)



m (現在)



六月燈の日に社殿の隣の土地でごちそうを食べる.

jの現況 (2006.10). jとkで矢印で示した樹木は同じもの.

写真7 道をゆく人 その1



「正月の砂運び」との説明。写真2-eと内容的に関連する。



説明は「藪掘り」。



湾という商業集落での買物風景。



「材木運搬 1/25で写したつもりが1/5になっていましたので大失敗」と説明文にある。これについては本文参照。

真群に含む資料性の別の一面にうつりたい。

写真7-dには、シャッタースピードを25分の一秒で写すべきところを5分の一で写してしまった（そのためにブレてしまった）旨の説明文が付記されていた。材木を浜へ運ぶ人の写真である。岩倉市郎は道を歩く人の写真をよく写している。その写真機の特定はできないものの、本来屋外太陽光では25分の一のシャッタースピードで写すカメラであったことがうかがえる。これはおそらくこのカメラの最も速いシャッタースピードを示していよう。三脚は使っていなかった旨の話が残っており、だとすれば、本来これは足を止めて脇を締めてカメラを構えて写さねばブレるシャッタースピードである。

道を歩く人を写した写真で多く登場するのは、糸満の漁民や魚売りである。当時早町<sup>そうまち</sup>という集落には、五十戸ほどの糸満の漁民がすみつき、追込み漁で魚をとり、それを販女が頭にのせて島内を売り歩いていた。頭上運搬の風習は喜界島在来のものではないという。三コマほどそうした写真がある（写真8-a, b, c）。また、ここでは示さなかったが帆をかついで帰る漁民の写真が一点ある、さて、その三点は販女の魚売り、これも頭にたらいをのせているものと（同8-b, c）、板をのせその上にサワラをのせているものを写している（同8-a）。

写真にはその中の魚は写っていないが、たらいを使う時には必ず中にはイカが入っていた。スミで



写真8 道をゆく人 その2 糸満の漁民



「糸満魚売 サワラは板の上にカメル 昭和11.8.6」.



「糸満魚売」ソテツの道をゆく.



「糸満魚売娘 嘉鈍 昭11.3」とある。b, cとも頭にタライをのせている。タライは中がイカの時だけに使った。



cの現況(2006.11)。嘉鈍から阿伝へ向かう道。阿伝に電気がひかれたのは1955年であるからcにはまだ電柱も写っていない。



「糸万娘 松葉拾いに行く処(於早町平家森)昭11.4.26」.



eの現況(2006.11)。道すじが変わり背後の山の稜線で特定。



説明文は「板付舟に松を立てたもの 喜界村坂峯」。白いラインで示したあたりにいつも沖縄のサバニが置かれていたという。板付舟については注6参照。



gの現況(2006.10)。入江が内へと開削され、また埋め立てられて土地が広がり、コンクリートの防波堤ができています。

それを運ぶ人の体が汚れるからである。それ以外の小魚の時はザルで運び、サワラのような大きな魚は板にのせて運んでいた。岩倉はこうした場合を撮りわけている。そしておそらく彼等のありのままの情景を写したかったのであろう。後から同じ歩調で歩き写そうとしたと思われる。その結果ブレてしまった。ただ一枚だけきれいに写っている写真がある（写真8-b）。何度も撮影を試み、やっと一枚ブレないものを得たのだろうか。岩倉が暗室で落胆したり苦笑したりしながら作業している姿すら浮かんでくるようである。

逆に道行く糸満の漁民に声をかけて止まってもらい写させてもらっている写真がある。（写真8-e）「糸満娘松葉拾いに行く処（於早町平家森）昭和11.4.26」と説明が記されている。糸満から来て家を借りて住んでいるだけに、暮らしに必要な燃料は、山に松葉をひらいに行つて得ていたのだろう。これら四枚の写真から岩倉の問題意識のあり方の一端がうかがえよう。

ひとつ補足しておく。この写真8-eを阿伝の古老に見ていただいた折、写真の説明を私がする前に、これは喜界の人ではないと瞬時に指摘された。一人の大人の女性と二人の女の子が縞を着ていることと、その着物の丈が短いことからそう指摘したという。糸満の人は縞の着物をよく着ており、喜界島の人ほとんどが緋のものだった。写真資料にはこうした形で、写っているものの要素ひとつひとつについて多岐多様に情報が広がっていく力がある。

#### 4 写っていないもの

糸満の漁民について、もうひとつ付記しておきたい。写真8-gは坂峯の浜の写真である。「板付舟に松を立てたもの 昭11.1」と説明文が付されている。坂峯に限らず、喜界の多くのむらは船を引きこみやすい入江に恵まれず、この写真でも単にサンゴ礁の入りくみといった地形が写っているが、ここが坂峯の唯一の入江である。ここは今、サンゴ礁が開削され、また周囲に諸施設が設けられて景観に変化はあるのだが、基本的にはこの形状をとどめている。説明文からわかるように、これは正月の船飾りを写すためにシャッターを押されて写された写真であろう。板付船とは地元のむらびとが地先の漁をするための小船である（注6）。

坂峯の里安九郎さん（1924年生）の話によると、この当時、いつもは写真の白線で示したあたりに糸満からの漁民のサバニが五、六ぱい引きあげられていたという。主にスズメダイの追い込み漁に来ていたというが、この写真にはそれが写っていない。「ここにはこの頃サバニが繋がっていたんだけど。」という里さんの説明から、逆に当時ありふれたものが欠けていたこと——正月のため糸満の漁民が帰郷していたのだろうか——、そこに糸満漁民の存在があったことが、追跡調査という形のなかで見えてくる。写真資料にはこうしたいわば「変化球」的なアプローチ——写っていて自然なものが逆にないという指摘——も成立し得るのであろう。

#### 5 点景としてソテツ

写真の画面に頻繁に姿を見せるもののひとつに、ソテツ、あるいはソテツの葉が上げられる。それはいわばさりげない脇役として写真のどこかに頻繁に登場する。

写真9-cは「納屋 砂糖小屋？」と記された写真である——この説明文に「？」が付けられているが、これはI-2でふれたように撮影者と台紙に貼って説明を記入した者が別人だったことを示し

写真9 砂糖小屋にて



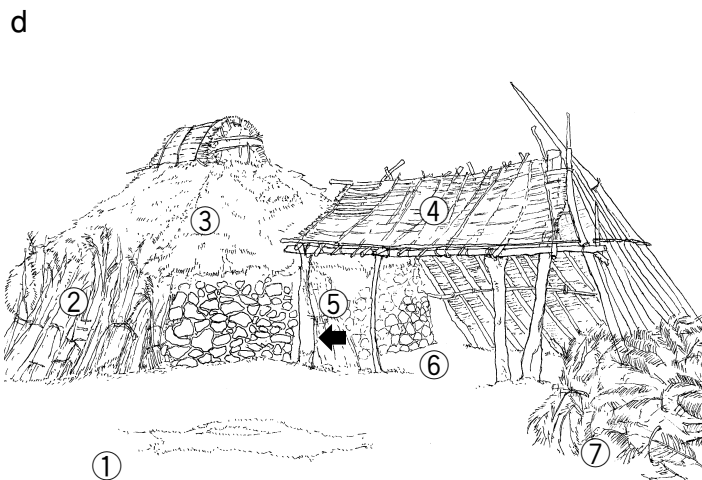
砂糖きびを馬の力で圧搾し、小屋で煮る。この馬を使う圧搾装置を喜界島ではクンマと呼んでいた。



「正月の小供（花良治）」と説明文にある。通常男の子は写真3-aのようにシャツ姿であったが、正月ということで和服だという。背後にあるのは砂糖小屋。これは写真の右下の土地の段差からわかるという。この段差の低いところが馬が圧搾器を引いて円を描くところになる。子供達の中のやや左寄りにすわっている女性は小学校の先生。



砂糖小屋とつくりかけの付属舎。砂糖小屋はマガヤで葺き、造りもしっかりしていたが、右の付属舎は作業がおわればとりこわすため構造も弱く屋根はススキで葺いていた。砂糖小屋には子供達が夜泊まることもあり、新婚早々の若夫婦がしばらく夜に泊まりにくることもあったという。



cの写真の説明

- ① サトウキビを馬の力を利用した圧搾器にかける場所
- ② ススキ。④の屋根を葺くための材
- ③ 砂糖小屋。屋根はカヤブキ。持続性をもった屋根のつくり。壁の石積は阿伝の磯のサンゴ礁の石
- ④ 未完成の屋根
- ⑤ 矢印の方向に砂糖を煮る焚き口がある
- ⑥ ハカマを取ったサトウキビを保管する小屋。この作業が終わればこの小屋は壊す
- ⑦ 燃料のソテツの葉

写真10 ソテツ その1

a (SA97)



「葉刈した蘇鉄葉は重要燃料 昭11.3 伊実久」.

b (SA77)



ソテツの実を浜に干す.

c (SA244)



d (SA238)



e (SA227)



c, d, e はいずれも農作業を写したものだが、耕地のまわりにソテツが植えられている

f (SA150)



手前の道をずっと奥へすすむと正面の台地にあがる阿伝坂（あでんびら）という坂道がある。道の両側に点々とソテツ。

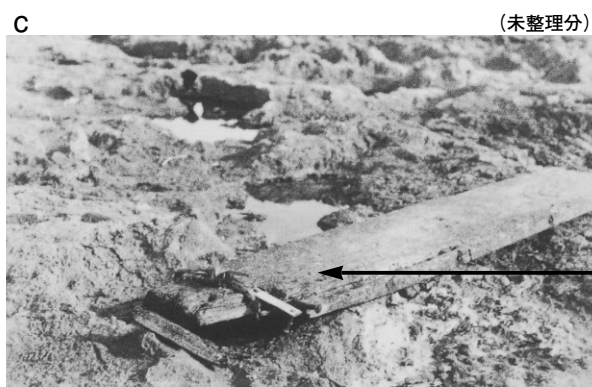
写真11 ソテツ その2 シメ（意思表示）としての利用



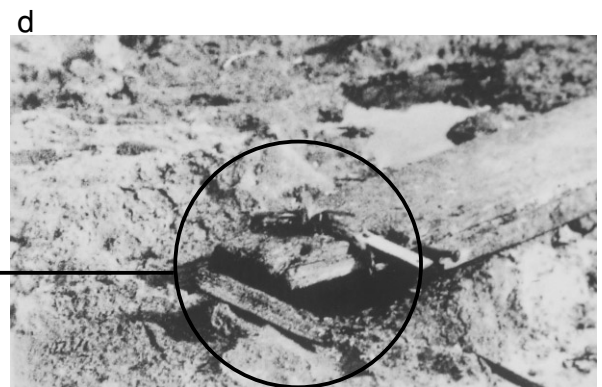
「種大根のしめ (シメ)」.



「シメ (しめ草の一種) (1) 拾った石にシメをしたもの (阿伝浜にて)」との説明.



c このシメはソテツでなく藁縄。「寄木のしめ (シメ) 左端を藁縄で結んである」と説明にある.



cのシメの部分の拡大



この二枚の写真にも、たねもみを播く作業の折の目安のシメのソテツの葉が見える。耕地の周囲の土地にもソテツが写っている.



g, hともに現在も耕地に見られる各種のシメ。gはソテツの葉, hはカヤ (いずれも2006.11).



写真12 1936年の旧暦3月3日（太陽暦3月25日）の阿伝の写真3点



説明文は「三月三日の芋餅扱」.



浜で遊ぶ子供たち.



遠景、写真右よりに浜にいる人が小さくシルエットで見える.

ていよう。阿伝出身の岩倉が説明文を書いたのであれば「？」の記号は付さなかったはずである。

さて、背後の山なみから見てこれは阿伝の浜に設けられたものである。この小屋の背後九尺（2.7メートル）ほどむこうには旧県道が走っていたはずである。阿伝ではこうした小屋は県道より下手につくられていて、煙突は県道のほうに向くことが多く、そのため九尺以上離してつくるよう役場から指示をうけていたからである。

写真9-cの説明図が同dになる。左の草葺きが砂糖を煮る小屋であり（写真9-d-③）、向かって右手に造られている片流れ風の付属舎は、サトウキビを置いておく小屋の造りかけになる。造りかけとわかるのは、屋根が未完成であり（同d-④）、砂糖小屋の左に屋根を葺くためのススキがおかれているからである（同d-②）。阿伝では人の住む家はマガヤで葺いたが、それ以外はススキかソテツの葉で葺いていた。マガヤは各家がカヤヤマを設けて実をまき、育成していた。簡易な造りの建物の屋根にはマガヤは使わない。写真画面の左下が馬でサトウキビを圧搾する場になるが、その右手にソテツの葉の小山が見える（同d-⑦）。これは左の小屋の中にある大鍋の燃料である。サトウキビの茎のハカマやソテツの葉がその燃料だった。これはそうした小屋の状況を写したものであり、ソテツの葉は、この光景のなかでひとつの脇役として写真に納まっている。

この地方でソテツといえは、何よりも食料不足の際の食べ物としての意味が大きい。飢饉や不作の折はもちろんであるが、長雨がつづき、サツマイモが腐った時などもこの植物の実に頼ることは多かった。しかしそれとともに大きいのは葉の燃料としての利用である。写真10-aにはそうした説明、

「葉刈りした蘇鉄、葉は重要燃料」との文が付記されている。かつて喜界島ははげた山が多かった。島全体が平らな島であり、山という地形の隆起表現を使うのはなじまないのだが、ここで山とは主に台地の上の一部と、その台地に上がる斜面をさしている。1933年頃からモクマオウ（木麻黄 オーストラリア原産のモクマオウ科の常緑高木）の木の植樹がすすみ、山が緑におおわれるようになったが、かつては燃料にこと欠く家もあり、地域によっては奄美大島から薪を買っていた。そうした事情も、写真10-aの右に積まれているソテツの葉の小山とつながるのであろう。

しかしそれ以外の場所にも、ソテツは写真の中にひんぱんにその姿を見せている。ひとつは田畑のまわりに植えられている姿であり、これは耕地の風除けを兼ねているのだが、同時に田畑の作業で種をすでにまき終わった区画や、立入り禁止の区画を示す際の目印として、その葉が切って使われている。葉を切って地面に刺し、その区画を示す。（写真10-c, d, e, f）

なんらかの意思を示すこうしたしるしをシミ、あるいはシメと呼ぶ。たとえば写真11-cは海から流れついた木材につけられたシミ。これは見つけた者が所有を宣言しているしるしになる。あとでとりにくるからここに置いておくが、これは自分が最初に見つけた物だ、という意志を主張する表示になる。この写真ではソテツの葉ではなく、縄が使われているが、こうした様々な意思表示の折にはソテツの葉が使われることが多い。最もありふれて利用しやすい植物だからであろう。

写真11-bは海の石が寄せられ、そこにソテツの葉が立てられている。おそらく石垣の補強として浜でこうした石を集め、所有のシミを置いたものであろう。阿伝の屋敷まわりの石垣はサンゴ礁の石を使っており、みなそれを浜で集め、家々に運んでいた。

写真11-fには「種大根のしめ（シメ）。これは種大根故大事にしてくれという意で、其大根の脇に蘇鉄の葉を差す 昭11. 3. 2, 7, 阿伝」との説明文が付してある。ソテツの葉でシミをしている大根は、種をとるから抜かすように、とのしるしになる。

岩倉市郎が沖永良部島を写した写真が30点ほど残っているが（整理分のみの確認点数）、そのなかに「甘薯畑シメ（但本島にシメなる語なし）此地に立入べからずの意。知名村下平川所見」と説明を付したものがあつた（SA220）。岩倉にとってこうした意思表示の慣行は留意すべきものだったことがわかる。

## 6 写っている要素の関連性の把握

喜界島の写真を見ていくと、必ずしも意図してそれを写しこもうとしたわけではなく、なにげない点景のひとつとして、またあるいはありふれた素材として多様に使われているソテツやソテツの葉が登場している写真が少なくない。これはそのまま、この地の人々の暮らしにおいてのこの植物の意味を語っているのだが、写した写真がごくありふれた日常性を写しているものだけに、文字媒体とは違った次元での資料性や伝達力を持ち得よう。聞き書きでソテツの重要性を聞き、文字でそれを表現した記録とは別の展開で、暮らしの中のソテツの存在を伝えてくれる。それは写真という媒体の情報力の中にある混沌さや多様さ、またそこにあらわれてくる強い印象喚起力の伝達性に関わるものであろう。しかしこうしたことも次年度の報告書においてふれることにして、喜界島の写真へともどりたい。

これら写真群の中から、たとえば「ソテツ」、たとえば「シミ」、たとえば「サトウキビ」、あるいは

写真13 追跡調査の資料から その1 中熊の水車

a (往時 未整理分)



b (現在)



aは「水車場 於喜界村中熊 昭11. 4.26」と説明文にある。現在中熊におすまいの佐加克彦さんの父親が昭和12年に完成させた水力を利用したの精米機。この写真の時点では未完成だったと思われる。この奥に豊かな湧水があり、そこから水路を開削して水を運んだ。この時期、日本は戦争に突入し始めており、そのことからくる資源不足を案じてのことだったという。私財を投じ、専門の建築士に設計を依頼した。1948年まで稼動していたという。

aの現況 (2006.10)。

c



bの写真の左の木々の中にコンクリートらしいものが見える。林の中にわけいと、コンクリートの水そうや水路が残っている (2006.10)。

d



水そうの壁には完成した年、(紀元)2600年の文字がみられる。



写真 14 追跡調査の資料から その2



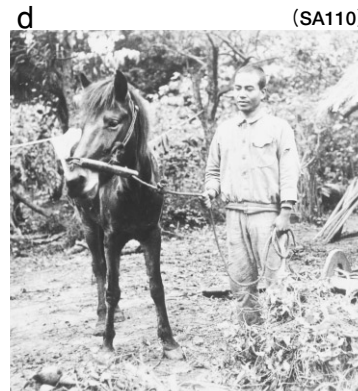
「赤山の気象 赤山 (a : jama) は旧暦三四日頃 昭11. 4」と説明文にある。アーヤマとは季節の山の状況を指す。山に若芽が出た頃、雨が降りそうで降らない日でありつつと山全体が少し赤味がかってくる。これをアーヤマという。写真はモノクロであり、写真2-eと同様、残念ながらそのイメージは伝わりにくい。



説明文に「屋根 南面の屋根の茅を竹にて圧へ台風へ備う 於坂峯村 昭11. 4.26」とある。台風にそなえて竹やスキをスタレ状につなぎそれを屋根にあて固定した。台風の際最もいたむのは頂の部分(イッチャという)で、ここには必ずそれを巻く。これをイッチャマキという。むらの男たちが全戸みまわり、女手しかない家などは手伝って備えた。



説明文は「高倉 六ツ股 (六本柱) mutsumata 阿伝復元常有氏宅」。高倉には柱が4本のもの6本ものがあった。後者を持つのは資産家になる。柱の木はイジマという木で喜界島にはなく大島にあったという。固い木だが、ネズミのぼらぬようよくみがいて使った。そのむこうに井戸が見える。阿伝は水にめぐまれていてほとんどの家に井戸があった。写真4-gの子供が持っているのはこの滑車の部分。



この馬は在末種の喜界馬だという。クツワのつけたかで判断する。右の図で示すようにaの部分は馬の顔の幅にあわせて縄の長さを固定しているが、口にかませるbは、むかって右側は固定せず、これを引くと顔が締められそれを馬への合図として馬を操作した。こうした方法は喜界馬の時代でおわったという。



子供達が持っている竹カゴにはメジロが入っている。右二つのカゴは左上に戸があり、そこをあけミカンをいれて外の木にかけておくとメジロが入る。入ると戸がおちるようになっている。中は間切りで三つにわけられていて、次々と奥の場所へと送りこむ。そしてそのカゴをまた木の枝にかけておくと別のメジロが寄ってくる。左のカゴは上段のつくりは右二者と同じだが、下は間仕切りのない広い空間になっていてここにメジロをいれる。こうしたトラップつきのカゴは小学校五、六年ともなると子供たちは各々自分でつくっていたという。



「花良治蜜柑の接木 昭11. 3 阿伝」。花良治とは阿伝の二つ隣のむらになる。花良治みかんとは、そのむらのみかんのことで香りと味が豊かな品種として知られていた。それを在来のみかんの木に接木しているところ。幹に切れ目を入れ、花良治みかんの接穂をそこに刺す。バランバー(ハランの葉)でそこをつつみ中に土をいれ周囲をしぼる。今もこれは行なわれているが、バランバーはビニールに、土は水ゴケに変わった。

馬



写真14-d (SA110)



写真10-d (SA238)



写真10-c (SA244)



写真10-e (SA227)



写真4-a (SA166)



写真10-a (SA97)



写真11-e (SA248)



写真11-f (SA250)



写真1-d (SA238)



写真10-b (SA77)



写真11-b (SA152)



写真11-a (SA98)



写真9-c (SA170)



写真10-f (SA150)



写真12-b (SA89)

シメ

関連 SA74, 86, 92, 138



写真11-d(未整理分)



写真12-a (SA60)



写真12-c (SA88)

写真15 ささやかなシュミレーション. その1

本編で紹介した「澁澤写真」から44点を選び、様々な切り口をテーマにグループ分けしてみた。もちろんこの点数では少なすぎるため、作業の方向性を示すべく試みた分類作業にすぎない。一点の写真が、テーマによって様々なグループに括られ情報源となっていることを示したかったにすぎない。図中「関連」として示したのは、本編で示せなかった各テーマの同類の写真であるが、これもその一部を示したものにすぎない。おそらくひとつの集落でこうした写真が千点ほどあれば、こうした作業の中から、シャッターで切りとられた画像群を通して、ある種の生活構造がよみとり得るように思う。



写真5-a (SA37)



写真4-e (SA50)



写真6-h (SA09)



写真5-f (SA105)



写真5-d(未整理分)



写真6-1 (SA19)



写真2-e (SA44)



写真14-a (SA168)

撮影・モノクロゆえの限界



写真9-b (SA64)



写真7-c (SA54)



写真7-a (SA55)



写真3-a (SA51)



写真7-d (SA67)



写真7-b (SA68)



写真3-c (未整理分)



写真8-a (SA161)



写真8-c (SA101)

生活空間としての浜



写真8-b (未整理分)



写真8-g (未整理分)

糸満からの漁民



写真14-e (SA163)



写真8-e (SA108)



写真6-j (SA05)



写真6-c (SA12)



写真6-f (SA011)



写真14-c (SA186)

ランドマークとしての信仰空間



写真6-a (SA11)

ここでは「馬」、「シメ」、「生活空間としての浜」、「ランドマークとしての信仰空間」、「糸満からの海民」、「撮影モノクロゆえの限界」を括るテーマとしてみた。なおグループを示す枠組の実線と点線は図をみやすくするためのもので、線の差自体に特に意味はない。



写真14-d (SA110)

砂糖

暮らしの中のソテツ



写真10-d (SA238)



写真10-c (SA244)



写真10-e (SA227)

関連 SA227 ~ 231



写真4-a (SA166)



写真10-a (SA97)



写真11-e (SA248)



写真11-f (SA250)



写真1-d (SA238)

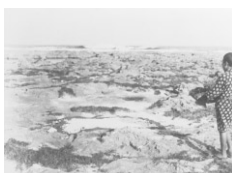


写真10-b (SA77)



写真11-b (SA152)



写真11-a (SA98)



写真9-c (SA170)



写真10-f (SA150)



写真12-b (SA89)



写真11-d(未整理分)



写真12-a (SA60)



写真12-c (SA88)

祈りの場

行事・旧3月3日

写真15 ささやかなシュミレーション。その2

テーマは「暮らしの中のソテツ」「行事」の諸々、「砂糖」「人と物の動き」「祈りの場」

行事・旧8月

行事・一日,十五日



写真5-a (SA37)



写真4-e (SA50)

関連 SA48, 49



写真6-h (SA09)



写真5-f (SA105)

関連 SA02, 03



写真5-d(未整理分)



写真6-1 (SA19)

行事・正月



写真2-e (SA44)

関連 SA116



写真14-a (SA168)

関連 SA65, 95, 96, 139



写真9-b (SA64)



写真7-c (SA54)



写真7-a (SA55)



写真3-a (SA51)

行事・旧八月



写真7-d (SA67)



写真7-b (SA68)



写真3-c (未整理分)

関連 SA84, 90, 232, 234, 235



写真8-a (SA161)



写真8-c (SA101)



写真8-b (未整理分)



写真8-g (未整理分)

行事・旧6月



写真6-j (SA05)

関連 SA14~18, 20~29



写真6-c (SA12)



写真6-f (SA011)



写真14-c (SA186)



写真6-a (SA11)

人と物の動き

農作業・田植えまで

関連 SA83, 85, 87, 92, 93, 134, 237, 239 ~ 243, 245 ~ 247, 249, 251 ~ 269, 271 ~ 282



写真14-d (SA110)



写真10-d (SA238)



写真10-c (SA244)



写真10-e (SA227)



写真4-a (SA166)



写真10-a (SA97)



写真11-e (SA248)



写真11-f (SA250)



写真1-d (SA238)

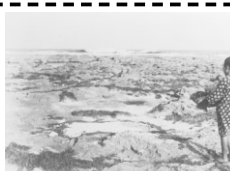


写真10-b (SA77)



写真11-b (SA152)



写真11-a (SA98)



写真9-c (SA170)



写真10-f (SA150)



写真12-b (SA89)



写真11-d(未整理分)

子供の衣服



写真12-a (SA60)



写真12-c (SA88)



写真5-a (SA37)



写真4-e (SA50)



写真6-h (SA09)

関連 SA48, 49



写真5-f (SA105)



写真5-d(未整理分)



写真6-1 (SA19)

写真15 ささやかなシュミレーション。その3

テーマは「農作業・田植えまで」「子供の衣服」「子供の遊び」「食生活」「撮影・様式とくつろぎ」



写真2-e (SA44)



写真14-a (SA168)



写真9-b (SA64)



写真7-c (SA54)



写真7-a (SA55)



写真3-a (SA51)



写真7-d (SA67)



写真7-b (SA68)



写真3-c (未整理分)



写真8-a (SA161)



写真8-c (SA101)

撮影・様式とくつろぎ

子供の遊び



写真8-b (未整理分)



写真8-g (未整理分)



写真14-e (SA163)



写真8-e (SA108)



写真6-j (SA05)



写真6-c (SA12)



写真6-f (SA011)



写真14-c (SA186)

食生活



写真6-a (SA11)

は「信仰空間」といった形でキーワードを設定し、それに沿って250点の写真の絵面を検討し抽出していくと、次元の異なる切り口にカテゴライズされた写真グループがそこにいくつも生まれてくる。当然同じ写真がいくつものグループに属することにもなる。前述したように、それが写した人間の関心や写された状況を反映しているのであれば、「シャッターのブレ」もひとつの切り口になり得よう。こうしたことについては26ページから31ページにかけての写真15で、そのささやかな試行のシュミレーションを示してみた。

写真12-aは、ウルムッチーというモチを搗いている写真である。これは水田の一部につくられるタイモというイモでつくるモチだが、三月三日（「サンガンニチ」とよばれる）の節句に必ずつくられた。またこの日は、海に行き潮干狩りや磯釣りをして海のことを鍋に入れて食べなければ耳が聞こえなくなるという言い伝えがあった。むらの人は昼から海に出かけた。女達は潮干狩りでカニ、貝類をとり、男たちは釣りをしたり、潮溜まりにミッチャイという草の汁を入れて魚を採った。この汁を入れると魚が酔ったような状態で浮いてくるという。写真12-aと同b, cは同じ日の光景であり、すべて1936年の旧3月3日に写されたものである。「サンガンニチ」とのカテゴリーでこれらの写真はひとつのグループとしてまとめることはできる。しかし、また写真12-b, cは、たとえば「生活空間としての磯」として写真を集めてみると、浜に脱穀あとの稲ワラを干している写真、磯に蘇鉄の実を干している写真（写真10-b）、同じく浜に大根を干している写真などとひとつのグループに括することもできる。

古い写真の追跡調査という作業からは、ともすれば同じ地点における新旧景観の比較といった方法が、まず導かれやすい。もとよりそのことの意義は大きいのだが、これはよほど明確な視点をもって景観としての生活文化を把握しようとの姿勢がない限り、問題把握が広くとも浅い形に納まってしまっておそれがある。そのためそれを補足する方法として、古い写真群を対象として様々な切り口から写っているものをカテゴライズし、そのキーワードの構造を把握する試行についてふれてみた。これと比較する視座を設けるとすれば、古い写真と同じ景観を写した現在の景観の写真群に対して同じような作業を行ない、そこからのキーワード——これは必ずしも古い写真と同じ語ばかりになるとは限らない——の構造自体を比較する方法が考えられないだろうか。

それに関連してひとつ補足すれば、本編で紹介した喜界島の1935年前後の写真には電柱が一切写っていない。喜界島に電気が復旧するのは1955年以降のことだからである。電力のない世界の生活感覚がこれら360点の写真群の底に流れている。そのこと自体、新旧の写真群を群としてすりあわせ比較する場合は避けて通れぬ問題を含んでいる。

この写真群に対しての様々な切り口でのカテゴライズ、その構造の把握、それはこの写真群における「ごくありふれた日常」の景観構造を示していようが、ただ、私の実感からすれば、こうした作業を対象地域を限定して行なうには、この喜界島の整理済みの250点という点数からでは少ないと思われる。作業のひとつの方向性、可能性は示し得るとしても。

こうした点については、来年度に私達の作業班の報告書として論をとりまとめる予定のため、ここでは走り書き的なメモとしてあらわしておくにとどめる。なお喜界島における追跡調査の成果の一部を巻末のリストのひとつの欄に簡略に示しておいた。

この調査は2006年10月、11月に行なったものである。その際、前述した得本拓氏、晶貴一真し、



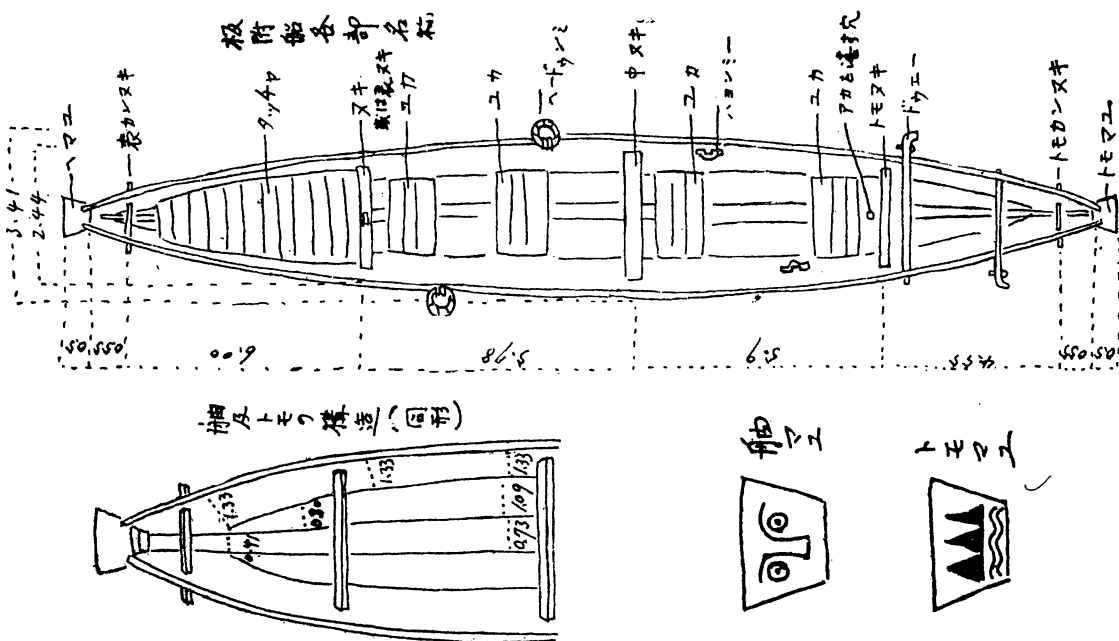
里安九郎氏，のほか政井平進氏，長岡茂治氏，長岡トシ氏，佐加克彦氏に様々にお世話になった。末筆ながら記してお礼を申しあげておきたい。(注7，注8)

注

- (1) その一例としてCOEの本作業班では，2006年5月10日に，当時平凡社の編集部におられた久田肇氏をお招きして「写真，絵画資料の著作権について——出版の現況から」というテーマで研究会を行った。
- (2) 宮本常一「民俗事象の捉え方・調べ方」(池田彌三郎，宮本常一 和歌森太郎編 『日本の民俗 第11巻 民俗学のすすめ』 河出書房新社 1965年)
- (3) 未来者刊行の『未来』440～444，446(2003年)に「フィールドでの記憶——宮本常一の写真から——として連載。
- (4) 宮本千晴「世間師の学」(『生活学会報』一八号 日本生活学会 1981年所収)
- (5) この書はまだタイトルも未定であるためこうした表現をとった。なおまた拵さんは次のようにも話されている。

小学校高等科二年出ると，ちょうど十五，六でしょ。十六くらいで島の者は皆島の外に出ちゃうでしょ。だから十六くらいでは自分の島について詳しくはわからないんですよ。私は高等科でて二年くらいは島を出ていましたけど，病気して二十五(歳)までは田舎に居たもんだから，島のことは一番記憶に残っているし，良く知っているほうなんです。私は肺病にかかりまして，島の中をぶらぶらぶらぶらして，阿伝のことは隅から隅まで知っていてどの家も行かない家はありませんでした。でも喜界島全島全体を知ったのは岩倉さんと調査したからで，それは一年半もかけて毎日毎日自転車で島中を回りました。岩倉さんも病気，私も病気上がりでしょ，二人とも肺病上がりでしょ。そんなにきばって今日明日のうちにこうしなきゃならんあしなきゃならんというもんじゃないでしょ。療養をかねているもんですか，長期調査なんです。あるむらへ行くでしょ。その晩はそのむらに泊めてもらって，次の日に次のむらに行くという具合なので，出かけると一週間くらい帰らないんですよ。旅行みたいなもんです。島全体のどのむらも行かないむらはないんです。だから詳しく知ったんです。そうでなければ，知らないですよ。田舎の人でも島全体は知らないですよ。

- (6) 板付船の図。『アチックミュージアム彙報52 喜界島漁業民俗』(岩倉市郎1941年)より



- (7) 喜界島全体の概要については拵嘉一郎『喜界島風土記』（平凡社 1990年）参考にした。  
 (8) 本編で紹介した往時の写真の撮影地点の概略。図中の番号が本編中の写真に付せられた番号を示す。  
 （建設省国土地理院五万分の一地形図「喜界島」をもとに作成）

